

## あとがき

本報告書で紹介した PET ベースフィルムの異常現象は、発見当初、専門家の所見では、ベースの「劣化」とは認められなかった。つまり、尋常では考えられない劣悪な環境下に置かれた結果であり、本館は、そう明言はされないものの、形としては管理不行届きの烙印を押されたわけである。

このように一方的に断定されたものの、フィルムの異変は、何が原因で、どのようなプロセスを経て生じたのか、納得のゆく説明は得られなかった。当事者として、環境の改善に努めることは無論のことであるが、抜本的な対策を講じようにも、まずその異変の機構を解明しないことには、どこにも進みようがない。止むを得ず自前で調査を始めたが、何より困惑したのは、所蔵者・管理者向けの参考書がほとんど見当たらないことで、理系的素養など皆無であるという言い訳も許されないまま、化学式の並んだ文献と格闘することになってしまった。本書は、この課題に直面してから数年に及ぶ悪戦苦闘のドキュメントであるとも言える。そうした事情ゆえ、専門家諸氏には、笑止と思われる箇所も少なくないことであろう。力不足は痛感しているが、仮に、この素人の体当たりに、胸を貸してやろうという反応をいただければ、慣れない勉強に費やした汗に対して、これ以上の酬いはない。

フィルムの異常現象は、果たして、本館の管理体制の不備のみに帰せられるかどうか。ベースの「劣化」ではない、つまり、特殊事例として他機関が関知する要はない、ということで本当によいのか。当事者として、当然、泥を拭きたい気持ちは強くあったが、それは、必ずしも、その泥を他に擦りつけること、つまり、供給サイドに責任を転嫁することを意味しない。そうではなく、資料をより効率的に永く保持していくための条件を、小賢しい利害を超えて、改めて検証するための場を設けること、泥を拭き取る前に、まずその泥の成分を分析すること、これこそが泥を被ったという事実を、最大限に活かす方途ではないだろうか。そもそもそうしない限り、泥を適切に拭き取る方法は分からないのである。

その意味で、本報告書は、あくまで検討の場を設けた、問題を提起した、という意味合いのものに過ぎない。仮説を提示し、対処のための試行錯誤を紹介したが、実態を解明し、より適切な保存方法を定式化するためには、さらに事例を蓄積し分析を重ねる必要がある。そのためにも、マイクロフィルム所蔵機関の方々には、是非いちど、現状を虚心に観察し、それを共有の情報とすることは出来ないか、ご検討をお願いしたい。本館のような重篤な事例が臆面なく公表された後であれば、仮に異変が発見されたとしても、身内の恥を晒すなど、隠蔽に奔走する必要もないであろう。

本報告書は、各方面におけるご支援抜きに、成立することはありえなかった。素人の疑問や提案にいちいち丁寧に応えてくださった保存化学の先生方、各企業の技術担当・営業担当の方々、保存環境の現状を包まずお教えくださった各機関のマイクロフィルム担当の方々、このほかにも、様々な方面でお世話になった。

関係者各位に、感謝の意を表したい。

更に言えば、本書は、同学・先学達の知見の賜物でもある。引用・参照した文献は各章末にすべて掲げたが、読者諸子には、彼らの活動・考察が（その全貌とは言えないまでも）我々の懐で甦ったことを、是非とも心の隅に置いておいていただきたい。そして、こんご、仮に、本書に刻まれた我々の活動や考察が、読者の中で甦り、新たなプロジェクトや論考が生れるとすれば、過去の活動は三たび命を吹き込まれることになる。

そのようなことはこの報告書に限らない。一般に資料とは、この当たり前な、しかし、改めて考えると不可思議としか言いようのない、人間活動のリレーを繋ぐものなのであろう。そして、そのバトンを受渡す場を保障することこそが、資料保存という活動の本義なのであろう。その活動の中には、もちろん、この資料保存活動の内容を書き留めること、さらに、その「報告書」という名の資料を、後世に伝えてゆくことも含まれている。

平成 21 年 3 月  
東京大学経済学部資料室

マイクロフィルム状態調査報告書

2009年3月30日発行 【非売品】

編集 東京大学経済学部資料室

発行 東京大学経済学部図書館

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1